

小松美穂子著「看護はアート」交遊抄、日本経済新聞 2010年6月23日朝刊を読む

看護はアート

1. 聖路加短期大学に 1963 年に入学した私は、日野原重明先生(現聖路加看護学園理事長)から内科学の教えを受けた。その後、先生は学長に就任され、私は助手、講師として仕えた。今でも学園評議員としてささやかながら手伝いをしている。多くの学びの機会と貴重な指導をいただいた。最近 は大学の運営について気にかけてもらい、恐縮している。
2. 先生は常に「看護は科学に支えられたアートである」とおっしゃる。対話を通じて患者の相互理解が可能になることで、患者の心や体の痛みに加え、自分が未経験のことまでも察知できる医療従事者を目指す。その相互理解に至るコミュニケーションこそが、看護における基本理念としての「アート」だという。
3. 末期がんだった私の友人の一人は、先生との対話によって苦痛から解放され、安らかな人生の幕を閉じた。看護教育に携わって 40 年以上たつが、先生の真摯な姿勢を模範として教育活動に取り組んできた。
4. 先生は 98 歳になった現在でも新しいことに挑戦している。医療教育のためのライフ・プランニング・センター活動や、プライマリーケア活動など、枚挙にいとまがない。その元気な姿にいつも励まされている。

[コメント]

茨城キリスト教大学学長の小松美穂子先生は日野原先生のお弟子さんで、「看護は科学に支えられたアートである」との日野原先生のお考えを紹介して下さった。私は、「教育は学問に支えられたアートである」と考える。